

デジタル教材・教具の活用

小学部

小学部の実践報告は、普段の授業の中で活用してきたデジタル機材・教具を整理することで、今後の授業に役立てられるようにすることが目的である。

普段の授業に活用してきた機器、サイト、番組、アプリ、自作教材などを分類整理し、内容紹介、活用方法などについて2年間分としてまとめたものである。本年度から教室棟でのWifiの使用ができるようになったこともあり、いろいろと試行を行っているところである。今後もデジタル教材については実践を積み、活用方法を検討していかねばならないが、今回これまでの実践をまとめることが今後の教材研究等において何かの参考になれば、と願う次第である。

生徒の学習意欲を高めるための指導実践

中学部

中学部に在籍している生徒の病種や状態像は様々で、循環器系・内分泌系の疾患の生徒や発達障害がベースにあり二次的な障害として精神的な疾患となった生徒も在籍している。

中学部の実態としては、「学習に対し消極的である。興味・関心の幅が狭い。自己肯定感を高く保てない。集団の中で、自己を表出することが難しく、友人関係を築きにくい。生活経験が不足している。」等が挙げられる。その要因として、病気のため長期欠席があり、学習の積み重ねが難しかったり、発達障害がベースにあり学びにくさがあったり、病状の変化への不安を感じたりなどが考えられる。

このような状況の中、進路や将来の社会自立を考えたときに、生徒の学習意欲を高め、社会性を向上させることが必要である。そのためには、まず、自己肯定感を高め、何事にも意欲的に取り組める力を持つことが必要ではないかと思い、このテーマを掲げ各教科等で実践してきた。その取組について報告する。

「教科・科目の指導における社会的・職業的自立に向けた指導の実践」

～地理歴史科における取組から～

高等部

高等部慢性疾患学級では、平成25・26年度に県の特別支援学校教育課程研究集会のテーマ「高等部における職業教育の効果的な指導の在り方」に沿って、学部内での取組を

行ってきた。その中で、必履修教科・科目の指導の中で行っている「職業的自立のために必要な力」を身に付けさせるための工夫(配慮事項等)について特に重点的に取組を実施し、その中で国語・社会・数学・理科の教科について実践とその課題等について報告した。

これを受けて、平成27年度からは、「高等部の職業教育における効果的な指導と評価の在り方」が上述の研究集会の2年間のテーマとなり、学部内においても日頃から意識して指導にあたっている。

本稿では、平成27年度の高等部地理歴史科における「教科・科目の指導における社会的・職業的自立に向けた指導の実践」について報告する。

教材を活用しての指導の実際

やしお学級

やしお学級の児童生徒は、隣接する国立病院機構宇都宮病院の重症心身障害病棟に入所しており、病弱に加え肢体不自由や視覚・聴覚等の重複した障害を有している。看護師の医療的ケアを受けながら、病棟ベッドサイドで床上学習を行ったり、可能な範囲で登校学習を行ったりしている。日々の学習の形態は、学部・学年・病気の状況により違いはあるものの、各教科等を合わせた指導「遊びの指導・生活単元学習」「日常生活の指導」や自立活動を中心に行っている。

そのような状況の中、児童生徒の目標達成に向けた日頃の授業実践において、多様な児童生徒の実態に応じた教材教具の工夫が必要となっている。

本稿では、どのような教材(自作教材や市販教材及びアレンジ教材など)を活用して指導を行っているかを、児童生徒の優位感覚と自立活動の内容との関連性にも触れつつ報告する。

ICTを活用した自立活動実践報告

おおり分教室

おおり分教室には、自治医科大学子ども医療センターに入院している小・中学生が在籍している。在籍期間は2週間から年度をまたぐ場合もあり、多い時には30名弱の児童生徒が在籍している。児童・生徒の実態は特別支援学校の訪問学級に在籍していた重度重複障害児から高校受検を目指す中学生まで様々である。

今年度は栃木県教育委員会の特別支援学校自立活動充実事業における取組のひとつとして、分教室における「教材・教具活用のための事例研究」という課題が出され、主に、ICT活用の分野での実践といった方向性が示された。本実践集では、その取り組みの中でタブレット端末やパソコンを利用したいくつかの実践事例について報告する。

学籍情報管理システムの開発と運用

～人為ミスの防止と多忙感解消を目指して～

学籍・情報管理部

主に病弱者を対象とした当校には、本校の他に自治医科大学とちぎ子ども医療センター内に、おおり分教室があり、入院している小中学生が学んでいる。分教室に在籍するのは、原則として入院中に限られるため、転入・転出が頻繁に起きる。それに伴う事務作業のミスを減らし、多忙感を解消するために、Microsoft Access© を用いた学籍情報管理システムを開発して運用しているので、本稿にて紹介する。